転生チートは家族のために

ユニークスキル『複合』で、快適な異世界生活を送りたい！

2

りーさん

Illust.
pokira

TENSEICHEAT HA
KAZOKUNOTAME NI

登場人物紹介
ベアトリス
謎の組織
『白夜の会』の幹部。
飄々としていて
掴みどころがない。
レオン
ルイの兄。
普段は誰にでも優しいが、
弟のことになると
周りが
見えなくなる。
リーリア
アレクシスの娘。
明るく社交的だが、
ちょっとだけ頑固な
ところがある。
ルディアーノ
ルイの協力者になる
フードの男。
レオンが行方不明に
なった事件を
調査している。
アルベルト
リーリアの兄。
父譲りで
頭の回転が早い。
ルイ
前世の記憶を持ったまま
ロードたちのもとに
転生した少年。
前世で家族との関係が
希薄だったため、
家族に対する思いが
人一倍強い。

プロローグ　冬の始まり

ヴァレン領の冬は、他の街とは違う。秋から雪が降り始めるくらい寒い気候の街ではあるが、吹雪になることは滅多にない。そもそも、吹雪になるほど強い風が吹くことがない。

そのせいか、ここでは、吹雪は神の怒りだと認識されていた。

そんなヴァレン領にも、ごく稀に吹雪が起こる日がある。

今までなら、そういう時は視界が不明瞭になり、凍死などの危険性があるから外に出ることが固く禁じられているのだと、領主のアレクシスは言い伝えとは切り離して考えていた。

だが、前回の一件を受けて、彼はそう単純に考えられなくなってしまった。

先日起こった、ルイの兄のレオンの失踪事件。レオン本人は救い出せたものの、多くの謎が残っており、犯人の正体も目的もいまだにわかっていない。

レオンの記憶は曖昧なため、証言にもあまり期待できずにいる。

ルイたちに聞いた話によれば、近頃領地で目撃されている黒いフードの集団が怪しいとのことだが、その集団の素性は判明していない。

わかっていることといえば、そのフードの集団がやたらと吹雪の日を知りたがるという不可解な

行動をとっていた情報だけだ。
なんのために吹雪が発生する日を探ろうとしているのかはわからないが、裏を返せば吹雪が来るまでは彼らがこの街に留まっている可能性は高い。
なら、それまでに調査を終えて、彼らの狙いを明らかにできれば。
（彼なら……どうするだろうか）
アレクシスの脳裏にルイという幼い少年の姿が浮かんだ。
彼の家でお抱えの針子をしているルーシーの息子。
普段は人当たりのいいどこにでもいそうな子どもに見えるが、アレクシスの末娘のリーリアと同い年だというのに、まるで一人の大人と対面しているように思わせることがある。
本人いわく、生まれた時から知識があり、教わっていないマナーがすでに身についていたり、料理のレシピ、ドレスのデザインのアイデアを持っていたりしたのだという。
時々見せる子どもらしからぬ言動もその知識の影響なのだろう。
そうかと思えば、家族主義の一面があり、仕事にかまけて家庭を放置していたアレクシスを軽蔑していたこともある。家族に対して人一倍強い思いを抱いているようだった。
くわえて、家族と離れてしまうという理由で学園行きを断ったり、危険を顧みずレオンの捜索に同行しようと願い出たり、そういう時は子どもっぽい我儘な振る舞いを見せていた。
その二面性のせいか、いまだにアレクシスはルイのことを図りきれずにいる。

とはいえ、そんな家族思いの彼のことだ。調査の協力を要請すれば、二つ返事で受けてくれるだろう。だが……彼は、家族のことになると少々冷静さを欠くところがある。場合によっては、こちらが振り回されることになりかねない。かといって、こちらがはたらきかけなくても、彼なら一人で勝手に動きかねない。そもそもルイは、黒いフードの集団が吹雪の日を知りたがっているということをアレクシスに教えた張本人だ。
吹雪が来るまでに事件を解決しようと動くことは十分に考えられる。
アレクシスはそこまで思考を巡らせてから軽くため息をつき、手元のベルを鳴らす。
ベルの音を聞き、すぐさま執事のメルゼンが部屋を訪ねてくる。
「お呼びでしょうか」
「〝牙〟を一人呼んでくれ」
「かしこまりました」
メルゼンが頭を下げて部屋を出ていく。彼らを使うことは滅多にないのだが、今回は使いどころかもしれない、とアレクシスは悟った。
そうでなくては、ルイを止められない。あの子狼は待てを知っていてもそれを実行する気がないのだから。
（杞憂で済めばいいんだがな……）

第一章　雪降る日の訪問者

レオンの失踪事件というイレギュラーはあったものの、無事にレオンとリーリアさまの誕生日会を終えて三日が経った。外では雪が積もりそうなくらい降っている。

ここから本降りになって二週間ほどで向かい側の家すらもろくに見えないくらいに吹き荒れることもあるそうなので、このヴァレン領ではそれまでに冬ごもりの用意を完璧にしておく必要がある。

我が家の冬支度は母さんが完璧に済ませてくれているので、僕たちはのんびり過ごしていた。

母さんは冬ごもりの間は針子としての仕事をするらしいけど、僕やレオンは本当にやることがない。

せっかくなら雪遊びをしたいなんて話してみたけど、両親に危険だと止められてしまった。

あまりの退屈さに、僕はすっかり冬が嫌いになり始めていた。前世ではそんなに嫌いではなかったんだけど。

早く春にならないものか。

そんなことを考えながらゴロゴロしていると、突如として母さんの声が響く。

「知りません！　帰ってください！」

下のほうから聞こえるから一階だろうか。

僕が自室のドアを開けると、廊下にはレオンがいた。

「あっ、ルイ。どうしたの？」

レオンが僕が出てきたことにに気づいて声をかけてくる。

「母さんの声が聞こえたから気になって。僕が確認してくるからレオンはここにいて」

失踪事件以降、レオンは部屋から出たがらなくなっていた。あんな経験をしたら無理もない。

ここはレオンに無理をさせず、僕が行ったほうがいだろう。

それにしても母さんの口調の強さから察するに、ちょっと異様な感じがする。

強引に何かを聞き出そうとしているような……

僕が食堂に繋がるドアを開けようとしたところで、再び声が聞こえる。

「ここの家の子どもが巻き込まれたというのは聞いている。その時の話を詳しく聞きたいだけだ」

若そうな男の声だった。

母さんたちが話している裏口のほうに向かい、思いきってドアを開ける。

「話ってなに？」

僕がそう言いながらドアを開けると、母さんがこちらを振り向いた。

僕は母さんのそばにいた人に視線を移して思わず息を呑む。

黒いフード――街の子どもたちの噂（うわさ）になっていた集団と同じような格好だった。

「ルイ！　何しに来たの⁉」
母さんは僕のそばに駆け寄り、男から僕を遮るように立った。
勝手に出てきた僕を叱りたいと思いながらも、まずは怪しい男から守ろうとしてくれているようだった。
「その子が巻き込まれた子どもか？」
「だから知りません！」
巻き込まれた？　その言葉で僕はすぐにピンときた。レオンの件か。
上手くいけば、この人から何か聞き出せるかも。
でも今は母さんがいる手前、勝手に話すわけにはいかない。
「僕知らないよ。おじさん、お家を間違えてるんじゃない？　母さん、お家戻ろ」
考えた末、僕はそう突っぱねた。
「え、ええ……では、そういうことなので」
母さんは少し戸惑った様子を見せながら、裏口を閉める。
「母さん。あの人が来たのって、レオンが失踪した時のことが関係してるの？」
「それは……」
母さんは言いにくそうに目をそらすが、僕がじっと黙って待っていると、諦めたように説明してくれた。

「そうよ。レオンがいなくなった時のことを詳しく聞きたいってしつこいの。向こうに誰って聞いてもはぐらかすし……そんな素性も知らない人に今のレオンを会わせるわけにはいかないじゃない」
「うん、そうだね」
やっぱりレオンの失踪事件に関することか。黒いフードの集団はあまり街の人と関わりたがらず、なぜか吹雪の日を知りたがっていた。
もしあの男が黒いフードの集団の一人だと仮定すると、吹雪の日を知りたがっていた目的について情報を得られるかもしれない。
そして、あの人がレオンの失踪事件にやたら関心を示しているなら、吹雪とレオンが巻き込まれた事件の関連性もきっとあるはず。
行方不明だった時のレオンの記憶だけ曖昧になっていることなどから、あの事件を単なる誘拐だと片付けられなかった僕にとって、これは真相にたどり着くまたとない機会だ。
領主さまもすでに調べてくれているのだろうけど、これ以上家族や街のみんなを危険な目に遭わせないためにも。
「母さん。父さんには話しておこう。レオンには僕からそれとなく伝えておくから」
「ええ。わかったわ」
「それと、領主さまにも話したほうがいいと思うんだけど、今は会いに行けないよね？」

「そうね……今は遠出するには雪が厳しいし、冬が明けてからにしましょう」
冬が明けてから……それではきっと遅すぎる。
向こうは吹雪の日を知りたがっているのだ。吹雪が過ぎれば、この街からいなくなっているだろう。もちろん勝手に危険が去ってくれるのはありがたいが、その前に新たな事件が起きる可能性だってある。
本当は、領主さまにも情報を共有した上で進めたかったけど……
「うん、わかった」
きっと家族には心配をかける。でも、このままじっとしていることはできない。
僕が動こう。

◇　◇　◇

そう決めたはいいものの、なかなか機会が訪れない。
あの不審な男が訪ねてきてからというもの、母さんは僕たちを一人にさせないように行動していた。水を飲むためにキッチンに向かおうとするだけでついてくる始末だ。しかも父さんにも話が伝わっているのか、二人での警戒態勢が敷かれている。
おおかた僕が何か勝手な行動をするんじゃないかとすでに読んでいるような動きだった。

実際、僕は命に関わる可能性もある危険な作戦を実行しようとしている。簡単に言えば、あの男に一人で接触しようとしている。僕が家族と同じ立場だったら、体を張ってでも止めるだろう。
それにしても母さんたちは、領主さまみたいな『大英断』のスキルは持ってなかったと思うんだけどなんでこんなに察しがいいんだ。
ともかく、二人の監視の隙を突いて、バレないように外に出なければ。
日中はいずれかが見張っていると考えると、子どもの僕が取れる方法はもう一つしかない。説教六時間コースの覚悟はできた。
ベッドから起き上がり、ゆっくりと部屋のドアを開ける。普段は明るい廊下は先が見えないほど暗い。慎重な足取りで、僕は階段を下りた。
「ワール　レドム」
僕は小声でコードを唱え、魔法でろうそく程度の小さな火を生み出す。明かり代わりだ。
もし両親に気づかれたら水を飲みたかったとでも言ってごまかして、成功するまで何度もトライしよう。
そんなふうに考えていたけど、特にバレることなく一回目で一階の廊下まで来ることができた。
裏口のドアを開けても誰も止めに来る気配はない。
「うー……寒い」
雪が降る気候であり、今は太陽の沈んでいる夜。寒くないわけがない。寒さ対策に服は着込んだ

けど、それでも寒い。着込んだせいで動きにくいし。
もうちょっと火を強くすれば少しは暖かいだろうか。
だけど、『魔力強化』が暴走する可能性がある以上は、不用意に火を強めることはできない。この辺りは木造の建物もそれなりにあるし、火を強めて引火でもしたら、ここまでの努力が水の泡だ。
慎重すぎるくらいがちょうどいい。
さて、外に出たことだし、早速向かいますか。
レオンは確か、貧民街の建物で囚われていたはずだ。なら、男もそこを調査している可能性が高い。
「確か……こっちだったはず」
記憶を頼りに、僕は貧民街に向かった。

◇　◇　◇

もうじき冬ごもりが始まる時期なうえに、街灯もないような街だから、道中は誰も歩いていなかった。けど、貧民街まで来ると、寒さをしのぐ家もないのか、布にくるまって寝ている人や、ぐったりとしながら座り込んでいる人などがいる。
生きていると信じたいけど……中には死んでいる人もいるだろう。

これがこの街の実態であり現実だ。針子の母さんがいて食堂を経営できている僕たちは、平民の中でもかなり恵まれている立場といえる。
（追い剥ぎはないと思うけど……）
寒さ対策に家にあった古い布を纏っているので、周りからはお金持ちの子どもには見えていないはずだ。
それでも一応は警戒しておかないと。ここにいるのは、今日を乗りきるので精一杯の人たちばかり。少しでも恵まれていそうだと思われれば狙われるだろう。
そうじゃなくても、レオンを誘拐した組織が潜んでいて、襲ってくることだってあり得るのだから、用心するに越したことはない。
その時だった。
ザッ……と地面を踏みしめるような音がする。雪が少し積もっている状態だけど、足音が消えるほどではない。霜を踏みしめるようなパキパキという音がはっきりと聞こえる。
その足音は、僕の後ろから聞こえてきた。誰かがついてきているのだろうかと、視線だけ後ろに向けるが、そこには誰もいない。
僕が歩みを止めると、足音は消える。僕が歩くと再び足音が聞こえ出す。誰かがつけてきているのは確実だ。
だが、僕を誘拐するつもりならば、ここまでわかりやすく後をつけてくることはないし、そもそ

も止まった瞬間に連れ去ろうと襲ってくるだろう。
ということは、狙いは別か。それとも、タイミングを窺っているだけなのか。
どちらにしても、いつでも逃げられるようにしておこう。
……そう警戒している間に、何事もなくレオンが捕まっていた建物に着いてしまった。
暗くてわかりにくいけど、外観はあの時見たものと同じだと感じるから、多分ここだと思う。
建物の中を調べたいところだけど、僕のことを尾行している存在がいるなら、袋小路になる場所には迂闊に入れない。
ここまで何もなかったし……あえて僕のほうから接触してみるか。
「ねぇ、さっきから僕の後ろをつけてきてるのは誰？」
なるべく大きな声で後ろに問いかけるけど、出てくる気配はない。でも、僕がじっと足音がしたほうを見ていると観念したのか人影が姿を表す。
予想通り……といっていいかわからないけど、その人物はフードを被っていた。
「……お前は、なんなんだ」
低い声で男が尋ねてくる。家に訪ねてきた人物とは別の声だ。
「おじさんこそなに？　どうして僕の後ろをついてくるの」
「お前が貧民街をうろついているからだ。お前はこの地区の住民ではないだろう？」
尋ねるようでいて、確信を持っているような口調だ。僕が貧民街の外から来るところを見られでもしただろうか。
「貧民街に出入りしたらダメなの？」
「こんな夜中に子どもが一人で貧民街にいるのがおかしいと言っている。なぜ今ここに来た。昼でもよかったはずだろう」
「おじさんこそどうしてここにいるの？　おじさんも貧民街に住んでないよね？」
黒いフードの集団の仲間であろうとそうでなかろうと、彼が街の外の人間なのは確かだ。
針子の母さんの仕事をそばで見てきて、リーリアさまの話し相手として屋敷に呼ばれているうちに、僕だって街の知識はかなり得られた。
彼が纏っているフードはそれなりに上等で、貧民街の住民が手に入れられる代物ではない。
そもそも行方不明になっていた人々が見つかった場所と知りながら、近づく街の人間はいない。
そんな場所にわざわざ出向いている時点で、僕と同じく何か目的があるはずだ。こうして普通に会話しているから、誘拐が目的という線は薄そうだけど。
「我々は調査をしに来た」
これまで話していた男とは違う人の声が響くと同時に、人影のようなものがこちらに向かってくるのが見えた。
この声には聞き覚えがあった。あの日、僕たちの家を訪ねてきた男だ。
「その声は、あの時の子どもだな」

そう呟いた時には、男はすでに僕の目の前に立っていた。
顔がはっきりと見える。美しく整った人形のような顔立ち。コバルトブルーの瞳は、僕を冷たく見下ろしていた。
「今度は君の番だ。ここに、何をしに来た」
どう答えるべきか。レオンのことを正直に伝えれば、この男はまた僕の家を訪ねてくる可能性がある。
だからといって、夜中に貧民街に出入りしている理由として他に相手を納得させられそうな説明が思いつかない。
正直に言いつつ、家族には迷惑がかからない方法……あれしかないか。
念のために持ってきておいて正解だった。
「話すのは構いませんが、僕と会ったことを口外しないと契約してくれますか」
僕は貴族用の銀色のコントラクトカードを取り出した。
相手はぎょっとした顔で僕を見る。
「それは銀のコントラクトカードじゃないか！　なぜ君が持っている！」
男が指摘するように、本来銀のコントラクトカードは僕のような平民ではなく貴族だけが所持するものだ。この時点で、僕がただの平民の子どもではないと理解したことだろう。
「聞きたいことがあるなら契約してください。そうでなければお話しすることはありません」

僕が目をそらすことなくそう言うと、男は少し戸惑っているような様子は見せながらも、懐(ふところ)からコントラクトカードを取り出す。
その色は銀色だった。この人も貴族か、その関係者なのか。
僕は男とカードを合わせる。
「僕と関わったことを口外しないこと」
「私の質問に嘘偽りなく答えること」
お互いに契約内容を告げる。契約を提案したのは僕だけど、こっちが守る契約内容がだいぶ厳しくない？
まぁ、口外さえされなければ知られて困ることはないし、別にいいけどさ。
あっ、忘れるところだった。
「あなたも僕の話を聞くなら契約してください」
僕は尾行していたもう一人の男にコントラクトカードを向ける。今約束したのは目の前の男だけだ。もう一人が口外してしまう可能性もある。
「すまないが、彼は平民だ。そのコントラクトカードでの契約はやめてもらいたい」
その言葉で、平民の黒いコントラクトカードは力が弱く、銀のコントラクトカードと契約すると一方的な契約となってしまうという領主さまの話を思い出す。
一方的な契約というのがどういうものなのかは知らないけど、止めに入るということはそれなり

に厄介なのだろう。
「……あなたと不利な契約を結んであげたんですから、これくらいいいのでは？」
今気づいたけど、この契約って結構不便かもしれない。
契約書と違って、内容は本人がその場で決めるから、互いの条件が平等でないようなとんでもない契約を結ばされてしまう可能性もある。
それとも、契約内容を告げてからカードを合わせることもできるのだろうか。
「わかった。それなら私が契約を行うから、君はしまってくれ」
「……仕方ありませんね」
僕がカードをしまうと同時に、銀のコントラクトカードを持った男が契約を始めた。
契約の内容は男の指示に従うというものだったけど、これなら僕のことを口外するなと男が指示すれば逆らえないだろう。
怪しい黒いフードの人物ということで警戒心を抱いていたけど、話は通じるようだ。
「これで契約成立だ。さて話してくれ」
「まずは何からお話ししましょう」
「君がここに来た理由と、銀のコントラクトカードを持っている理由が聞きたい」
一つ目に関しては予想がついているだろうにと思いながら、僕は一から説明を始めた。
レオンが失踪し、この建物から見つかったこと。犯人が捕まっておらず、まだ何か起きるのでは

ないかと考えていること。レオンがいた場所に行けば、手がかりがあるのではと思い、調べに来たこと。そして、銀のコントラクトカードを持っているのは領主さまの指示だと付け加える。
「なぜ領主はそのような指示を？」
「わかりません。スキルの詳細が見られるためという話を神官から聞きましたが、それだけです」
嘘はついてない。おそらくはユニークスキルや『複製』に関することだろうという察しはついているけど、領主さまからはっきりと言われたわけではないし、僕もまだ確信はない。
こういう自分でも定かではない場合は、契約違反にならない。
「スキルを見せろというなら、お二人のものも見せてください」
僕は先手を打った。ちょうど男はそのことを聞こうとしたのか、開きかけていた口を閉じる。
向こうも僕になるべく情報を知られたくないのだろう。
僕は契約によって男の質問に嘘偽りなく答えないといけないのだから、スキルについても聞けば話さざるを得ないんだけど、なぜかその手段は取ってこない。
良心が痛むからか、それとも気づいてないだけなのか。
この様子を見る感じだと、レオンを誘拐するようにはとうてい思えない。
だとするなら、いったい誰が黒幕なのか。不審人物の情報なんて黒いフードの集団以外で聞かなかったけど。
「事情はわかった。ならば、我々に協力してもらいたい」

「……何でしょう」
僕が警戒しながら聞き返したことに気づいたのか、男は安心させるような声色（こわいろ）になった。
「そう難しいことではない。この建物の案内を頼みたいんだ。一度入ったのなら覚えているだろう？」
「……あなた方と一緒に入るのですか？」
もしこの男が貴族なら、僕の貴族式話法――直接的な言い方をせずに意図を暗に伝える話し方に気づくだろう。
契約を交わして情報交換をしたとはいえ、僕からすれば男たちはまだ得体の知れない存在。レオンを誘拐した者ではないとしても、味方かどうかはまだわかってない。
拓（ひら）けた場所ならともかく、四方を囲まれた建物の中に入りたくはない。契約にも危害を加えないという条件は加えていないのだから。
「我々と目的が同じなら、君にとっても悪いことではないはずだ」
「志が違えば、いらぬ諍（いさか）いを招きましょう」
敵の敵は味方というのはフィクションだから通じるのであって、共通の敵がいようと協力してくれるとは限らない。
僕の目的は、家族がこれ以上危険な目に遭わないためにレオンを誘拐した者たちを捕えること。
その過程でこの人たちが家族に手を出さないと断定できる根拠は、今のところ何もない。

本来なら危険な場所から遠ざけるべき子どもに道案内させようという思考からも、多少は手段を選ばない危うさも秘めている。僕に言うことを聞かせるために家族に手出しする可能性だってゼロではない。

「……君は何歳だ？」

「六歳ですけど」

「とても六歳とは思えん言動だな……」

まぁ、前世ではもう少し長く生きてますからね。

今の見た目は六歳だから、この反応には複雑な思いもあるのだけど。

「君の言いたいことはわかった。ならば、危害を加えないという契約をしても構わない」

「……わかりました。あなただけなら構いませんよ」

さすがに二人一緒に連れていくのは、万が一の場合不利になりそうだから断りたいところだが、それなりに話が通じそうなこの男だけなら連れていってもいいだろう。

案内を必要とするあたり、ここの知識はそれほどなさそうだし、そんな中で建物の構造を把握している僕をどうこうするとは思えない。

僕の言葉に男が即答する。

「わかった。私だけがついていこう」

「それは――」

僕を尾行していた男が何か言おうとする前に、貴族らしき男に手で制止される。

「この子どもは奴らの手の者ではない。二人きりになったところで問題はない」

奴ら……？　それがレオンを誘拐した者たちなのだろうか。

「では、案内してもらえるか」

「わかりました。こちらです」

僕は男を連れて建物の中に入った。

◇　◇　◇

建物に入った僕は、せっかく二人きりになれたこの機会を逃すまいと、いろいろと聞き出すことにした。

「あなたの名前はなんて言うんですか？」

「……ルディとでも呼んでくれ」

本名というよりニックネームだろうか。もしかしたら、やんごとなき身分で、迂闊に名前を言えないのかもしれない。だが、領主さまが黒いフードの集団について知らなかったところを見ると、ヴァレン領の有力者とは関係なさそうだ。

そんな人がこの街に何をしに来たんだろうか。

「君は？」
「ルイと呼んでください」
僕もルディさんと同じように返す。応答はなかったけど、すんなり呑み込んでくれたようだ。
「ルディさんの調査っていうのはなんですか？」
「奴らの幹部がこの街に潜伏しているという情報を掴んだから、その真偽を確かめに来たといったところか」
さっきも言っていたけど、奴らってなんだ？
「奴らって誰ですか？」
僕が尋ねると、ルディさんは歩みを止める。
「ルイ。君が平民なら、黒いコントラクトカードも持っているだろう？」
「……口外禁止の契約ですね」
僕は黒いコントラクトカードを取り出し、ルディさんに向ける。
自分の部下には一方的な契約になるからと使わせなかった黒いコントラクトカードの使用を促すあたり、よほど口外されたくないんだろう。
領主さまも奥さまの呪いについて話す時に使っていたような気がする。
おそらく、このカードの差があると契約という名の命令を下すことができるのだろう。
僕の黒いコントラクトカードとルディさんの銀のコントラクトカードが重なる。

「私の話す内容を誰にも口外してはならない」
ルディさんが契約内容を告げてからカードを離したのを確認して、僕はコントラクトカードをしまう。
しまい終えると同時にルディさんが説明を始めた。
「『白夜の会』と呼ばれる集団だ」
「白夜の会……？」
響きからすると、組織の名前……というか、宗教団体みたいな感じなんだけど、そういう認識でいいのかな？
「白夜の会は世界中に構成員がいる大規模な組織だ。表向きは慈善事業をしているが、裏では人身売買や暗殺、誘拐に手を出すような闇の団体だ」
なるほど。そいつらがレオンを誘拐した可能性があるということか。
そして、この人たちが吹雪の日を知りたがっていたのは、白夜の会が吹雪の日に何かしら行動を起こすことを掴んでいたからだろう。
でも、なぜ吹雪？　そして、レオンが狙われた理由は？
まだこれらの疑問は解けなかった。
「この建物には人がいたか？」
「いいえ。レオンや他に捕まった人を除けば誰も」

そういえば、他の人たちはどうなったんだろうか。おそらくは領主さまがすでに事情聴取をしているはずだけど、僕はあれから会っていないし話も聞いていない。
僕にとってはレオンが最優先。あの時、他の人たちのことまで気にかけている余裕はなかった。
冷たいと思われようが、僕はそういう人間だ。
「そのレオンという子の様子は？」
「見つかった時には意識がありませんでした。意識が戻っても、事件当時のことはよく覚えていなかったようで、外出したことだけをぼんやりと覚えている状態でした」
「ふむ……黒魔法の影響かもしれないな」
「黒魔法……ですか」
黒魔法は、基本である赤、青、黄、緑と比べると珍しく、金や銀と比べればありふれた属性だ。
影から影への移動といったトリッキーな使い方をしたり、呪いをかけたりすることができる。
今は僕の魔力強化が施された七等級の白魔法によって完治しているけど、領主さまの奥さまも出会った時は呪いにかかっていた。そして呪いをかけた犯人はわかっていない。
もしかしたら、この件も白夜の会という者たちの仕業なのかもしれない。
となると、領主さまも無関係ではなくなるか。
この件を伝えておこうかと思ったところで、口外禁止の契約をしていたことを思い出した。
同時に、僕は気になったことをルディさんに尋ねる。

「なぜ領主さまに協力を仰がないのですか？」
「どこに白夜の会の間者が潜んでいるかわからない以上、迂闊に協力を願うことはできない」
なるほど。つまりは、領主さまの屋敷に白夜の会の者がいる可能性を疑っているわけか。もしいたら、その者は奥さまに呪いをかけた本人、もしくは関係者の可能性が高い。
屋敷に行って確認したいところだけど難しいだろう。
リーリアさまの友人という立場で招かれることはあっても、あくまで僕は平民。こちらから一方的に屋敷を訪ねることはできない。もうすぐ冬ごもりが始まろうとしている今の時期はなおさらだ。
「僕が白夜の会の関係者とは考えないのですか？」
「最初はそう思ったが、君である可能性はないと確信している」
「なぜですか？」
「事件に巻き込まれたのが、君の家族だからだ。単身でここに出向いてきたというのも含めて、組織の関係者とは思えなくてな」
たしかに僕が本当に白夜の会の関係者なら、身内であるレオンを直接誘拐なんてまどろっこしいことはしないか。ただ連れ出すように命じるだけで済む話だ。
「あっ、ここで止まってください」
話しているうちに隠し通路があった部屋にたどり着いた。
「この部屋に隠し通路があって、その先にレオンたちがいたんです」

僕は部屋の中に入り、隠し通路の前に立つ。ルディさんは壁をしげしげと観察していた。
「……なるほど。『隠蔽』のスキルによるものだな」
「『隠蔽』……ですか？」
僕の想像通りなら、対象を隠すスキル……ということだろうか。
それで通路ごと隠したというわけか。
「『隠蔽』によって隠された通路が『看破』によって突破されたというところか……」
ルディさんはぶつぶつと呟きながら観察を続けている。
なんで『看破』を使ったことにすぐ気づいたんだろう。
たしかにルディさんの言う通り、この通路は領主さまの部下の兵士が『看破』のスキルで見つけたものだ。でも、僕はそんなことは一言も話していない。
「ルディさん、よくわかりますね」
「……ああ、こういうのはよく見るからな」
僕の問いかけに答えるまで、妙な間があった。
声のトーンや目線からして、ルディさんが嘘を言っているようには見えない。
おそらく、このような場面をよく見るというのは本当だろう。でも、確信を得られたのはもっと別の根拠があったはずだ。
それこそ、スキルを使って把握したとか。

「それより、まだ君の兄が捕らえられていた場所ではないだろう。案内を再開してくれ」
「はい、わかりました」
ルディさんに対して強まる疑念を抑えながら、僕は隠し通路の奥に進んだ。

◇　◇　◇

隠し通路をしばらく進むと、穴があった場所までたどり着いた。
今は領主さまの手によって破壊され、一つの通路になっている。
「ここに黒い穴があったんですけど、僕にしか見えていなかったんです。今は壊されて穴はなくなっちゃいましたけど」
「穴の大きさは？」
「僕の身長と同じくらいです」
「ふむ……」
ルディさんはしゃがみこんで穴があった場所を食い入るように見る。
「おそらく、ここにも『隠蔽』が使われていたな」
「でも、僕には見えましたよ？」
「子どもにだけ見えるように設定していたのかもしれない」

領主さまは魔力が強いからって言ってたけど、ルディさんが言うような可能性もあるか。
狙いが子どもの確保なら、子どもだけが見つけられる穴を用意して誘い出す策があってもおかしくない。
「この先か？」
「はい、先導しますね」
この階段は廊下に比べれば狭い。元々の穴の大きさを考えれば当然のことだ。
ギリギリ二人が横に並ぶことはできるけど、知り合ったばかりの人とわざわざ密着したくはないし、ルディさんも同じことを考えているだろう。
僕が階段を下り始めると、ルディさんもその後ろをついてくる。
そういえばここの階段、かなり長かったんだよなぁ……前回階段を下りた時にはへとへとになっていたっけ。
今はあまり疲れは感じない。あの時はレオンが捕らわれているかもしれないということがストレスになって疲れてたのかも。
長い階段を下りきって、平らな地面を歩いていく。
改めて見ると、これだけの広さの空間がよく作れたものだと思わず感心してしまった。地球と違い、この世界は魔法があるから掘削（くっさく）作業は楽なのかもしれないけど、それでもかなりの労力ではないだろうか。

「白夜の会に魔力等級の高い魔法使いっているんですか？」
「それなりにはいるだろう。かなり大規模な組織だからな」
それなら、これくらいの空間は作れてしまうか。
「もしくは魔法陣魔法を使っているか、だが」
「魔法陣魔法……ですか？」
確か、魔道具を作ったり大規模な魔法を使ったりする際に用いられる魔法で、魔力量さえあれば誰でも使えたはず。
それなら、土を操る黄魔法の魔法使いに限定しなくても、この空間を作れていておかしくない。
まだ手がかりが足りないな……
しばらく歩くうちに二つ目の穴があった場所までたどり着いた。僕が歩みを止めると、釣られるようにしてルディさんも立ち止まる。
「ここにも穴がありました。この穴をくぐって進んだ先に、レオンたちが閉じ込められていた場所を発見したんです」
「確かに、『隠蔽』がかけられた痕跡（こんせき）がある」
痕跡なんてものがあるのか。僕には感知できないけど。それとも、ルディさんのスキルの効果だろうか？
やっぱりこの人、まだいろいろと隠しているな。

いまいち信頼しきれない。
銀色のコントラクトカードを持っていたから貴族なのかと思って、少し安心していたけど、その身分さえ本人から断言されたわけではない。僕みたいに例外的に与えられた可能性だってある。
そう考えると、この人についてわからないことが多すぎる。
「もうかけられてはいないんですか？」
「使用者が『隠蔽』を消したか、時間が経って消滅したかのどちらかだろう」
「時間が経つと魔法って消滅するんですか？」
「条件を満たさなければ効果が永続しないスキルは多い。『隠蔽』の場合は、魔力の供給が断たれた場合だ」
なるほど。僕の持つ『複製』も対象を理解した上で回数を重ねなければ、不完全扱いとなり消えてしまう。それと同じ原理なのだろう。
スキルについても、どこかで調べておきたいな。わからないままでも、日常を送る上で不便はないけど、今回みたいなイレギュラーがあった時に使いこなせないと困る。
とことん調べてみるべきか……悩みどころだ。
「ルイ。この先に案内してくれ」
「ああ、すみません」
思考にふけっていたせいで、ルディさんの存在が完全に頭から抜けていた。

まだこの人のことを信用しきったわけではないし、気を抜かないようにしなければ。
穴の奥に入り、ついにレオンが捕らわれていた牢に到着した。まだ調査が終わっていないのか、鉄格子などは撤去されていない。
ルディさんが鉄格子を詳しく調べ始める。
「ふわぁ……」
案内係としての仕事を終えたことで、一気に疲れが来たのか、僕は大きくあくびする。
夜更かしは子どもにはかなりの苦行だ。いくら昼寝をしっかりしていたとはいえ、普段寝ている時間に睡眠をとれないのは負担が大きい。さっきから眠くてたまらない。
「……眠いのならなぜ夜に来た？」
僕の大あくびの声を聞いて、ルディさんはこちらに背を向けたまま尋ねてくる。
「夜しか来られないからですよ。我が家に不審人物が訪ねてきたせいで母が過保護になってしまったんです」
僕がジトッとした視線を送ると、ルディさんは静かに目をそらす。
どうやら、不審人物の自覚はあったようだ。
「こちらも余裕がなくてな」
「吹雪の日が近いからですか？」
「……本当に、どこまでも知っている子どもだ」

ルディさんは呆れたようなため息をついてから、僕に説明してくれる。
いわく、天候が吹雪であることが、白夜の会にとって重要らしい。吹雪の日にとある儀式を執り行うことが白夜の会がこの街に潜伏している理由だとか。
そんなルディさんでも、なぜ吹雪の必要があるかまではわからないようだった。
だが、これで僕の中で白夜の会の大まかな目的とレオンが誘拐された理由らしきものにあたりがついた。
「儀式については何の情報もないのですか？」
「実行するのが吹雪の日でなければならないということくらいだ。何のための儀式なのか、どのような手順を踏むのかもわからない」
それは何もわかっていないのと同じなのでは。
そう思ったけど、裏の活動を隠している組織から、儀式を吹雪の日に行うことがわかっているだけでもすごいのかもしれない。
ルディさんは貴族のようだし、独自の情報網があるのかも。
「君はこの街の子どもだろう？　吹雪の日がいつかわからないか？」
「正確な日時はわかりません。その日の天候によって変わりますから。ですが、これまでは冬ごもりが始まってから二週間以内で起こることが多かったと思います」
この街で吹雪が発生する機会はそれほど多くない。冬ごもりの間に一、二回ある程度だ。

まぁ、そもそも雪の量が多くて視界が真っ白になるのは、普段の雪の日でも変わらない。
いずれにしても出歩くのが危険だから、あまり吹雪だけを意識することがないというのが本当のところだけど。
「冬ごもりはいつ頃に始まる？」
「もう始まってますよ。今でこそ雪は強くありませんけど、二週間もすれば向かいの家も見えなくなります」
だからそれまでに解決したいということを、僕は言外に匂わせた。
その意図まで伝わったかはわからないけど、ルディさんが吹雪の日を特定するヒントくらいにはなっただろう。
「……そうか。わかった」
ルディさんは鉄格子から離れ、入り口のほうへと戻っていく。
「用は済んだ。話は地上に戻ってからにしよう」
「わかりました」
帰りはルディさんが先導してくれるらしい。背中を見せているあたり、僕のことをある程度信用しているという意味だろうか。
でも、時折後ろを振り向いている。まだ警戒心が完全に解けてはいないということか。ついてきてるか確認しているのもあるんだろうけど。

やっぱり、ルディさんとはこのくらいの距離感がちょうどいいな。
それから僕たちは一言も話すことなく地上へと戻った。

◇　◇　◇

外に出た僕たちは、ルディさんの部下らしき男と合流する。
男はルディさんに一目散に駆け寄った。
「いかがでしたか？」
「収穫はあった」
あれで何かわかったのかな？
領主さまも同じルートを通って調査したと言っていたけど、まだ手がかりを掴めていない状況なのに。
元々ある程度ルディさんは情報を持っていて、欠けていた部分が埋まったという感じだろうか。
「では、その子どもは？」
男は僕を睨みつける。
う～ん……そこまでされるほどのことをした覚えはないんだけど。子どもにしては生意気な発言が多かったかもしれないけど、こっちだって自分の身の安全を確保するためだったんだし。

「奴らとは関係ない。対処の必要はない」
対処か。まぁ疑いが晴れたならいいけど、なんか言い方が気になるな。
僕がどこにでもいる平民の子どもとは違うことくらい、これまで一緒に行動してわかったはずだろうに。
もやもやした気持ちでいると、ルディさんが僕に手を差し出してきた。
「ルイ、手を出してくれ」
なんだろうと思いながらも言われた通りに手を伸ばすと、手のひらにブローチのようなものが置かれた。
素材はおそらく石で、色は瑠璃色。石の中央に星のような形の白い花が彫られている。
「なんですか、これ」
「本当なら君には家で待機していてもらいたいが、君がこのまま大人しくしているだけとは思えなくてな」
ふーん……本当によくわかっているじゃないか。なら、これはおそらく……
「また同じようなことが起きた時にこれを見せろということですね」
同じようなことと言うのは、今回のように尾行されていた場合だ。
ルディさんに話を聞いた後なら、僕が白夜の会の息がかかった者の可能性を疑っていたことは明白だし、ここにいないルディさんの仲間が同じように考えていても不思議じゃない。

黒いフードは街の住民の目撃情報だと八人くらいいるみたいだし、今後同じように疑われた時にこのブローチを見せろということだろう。いわば、このブローチは協力者の証（あかし）といったところか。
「この理解力……彼は本当に子どもですか？」
ルディさんの部下がボソッと言う。
「六歳だと言っていたからな」
なんか、またしても僕の年齢が疑われている気がする。心当たりはあるから何も言わないけど。
「ルディさんたちは、まだこの街に滞在するつもりですか？」
「すべての情報を手に入れたわけではないからな。君の兄にも話を聞けていない」
「……何度訪問されたとしても追い返しますよ」
「ならば……君の家を訪ねても意味はなさそうだな」
拒絶ともとれる言い方をされたのに、ルディさんは笑っていた。
「今のも貴族式話法か。誰から習った？」
やっぱりこの人も貴族だな。そうじゃないと僕の言葉の真意に気づけるはずがない。
「領主さまのお屋敷に仕えている方から習いました」
「なぜそのようなことを？」
「母とともに領主さまの屋敷を出入りするようになりましたから。母は針子ですので」
実際にはリーリアさまの話し相手になったからだけど、それを話せば、僕がリーリアさまの話し

相手に選ばれた理由も話さなければならないだろう。そうなると、僕のスキルのことも芋づる式に話すことになりかねない。
僕がユニークスキルを持っているうえに、英雄が持っていたスキルと同じ『複製』も持っていることは、切り札としてできる限り隠しておきたい。
契約によってルディさんから聞かれたら嘘がつけない以上、悟られたらすぐに暴かれてしまう。
聞かれないように立ち回ることが大事なのだ。
「それなら、出入りしている際に奴らと思われる存在は見かけたか？」
「わかりません。僕が関わったのは領主一族の方を除けば執事のメルゼンさんという方くらいですので」
もしかしたら見かけた使用人の中にいたのかもしれないけど、見た目で判断できるならルディさんたちがわざわざ街中に忍ぶ手間は必要ないはずだしね。
「……ならば、奴らが出入りしている可能性はあると思うか？」
「……あると思います。ですが、これ以上は領主さまのほうで結んだ契約に抵触しかねないのでお話しできません」
奥さまの呪いに関しては、領主さまに口外禁止の契約を結ばされている。
領主さまはそもそも破れるようにできてはいないと言っていたけど、もし破ってしまったらどうなるかわからない。

烙印を刻まれるとだけ聞いたけど、それ以外にも何か代償があるかもしれない。避けられるうちは避けたほうがいいだろう。
それにルディさんも契約だと聞けば、深掘りしてこないはずだ。
「わかった。じゃあ今日のところはここまでだ。君は家に帰るといい」
「はい。また機会があれば」
きっと、また近いうちに会うことになる。
そんな予感を抱きながら、僕は帰路についた。

第二章　不穏な影

夜中に外出したことについては、家族には気づかれていなかった。
帰宅してから階段を上る時に父さんと出くわしたけど、水を飲みたくてキッチンに行ったという僕の言い訳を信じてくれた。
でも、次また上手くいくとは限らないから、夜中に出歩くのは控えないと。
ルディさんからもらったブローチは、僕の部屋に隠している。掃除されると見つかるかもしれないから、部屋を出る時は持ち歩いているけど。
「ルイ」
レオンに声をかけられて、部屋でぼけーっとしていた僕は顔を上げる。
「なに？　レオン」
「本格的に冬ごもりする前に近所で遊ぼうってサンたちと約束してたんだけど、ルイも来る？」
「行く！」
行かない理由がない。退屈で仕方なかった冬に遊べるのだから。
「でも、僕が遊んでもいいの？」

今まで両親には危険という理由で止められてきた。だから今年もダメだと思っていたけど。
「もう少年式を迎えたからいいだろうって言ってたよ」
少年式を迎えたから……ね。この世界では少年式というのは一つのボーダーラインなのだろうか。
僕からすれば、五歳と六歳ってそんなに差がないような気がするんだけど……
まぁ、許可が出てるならいいか。
「ほら、行こう」
「はーい！」
僕は元気よくレオンの後ろについていった。

◇　◇　◇

裏口から出ると、すでにサンくんたちが待っていた。
みんな布を重ねて纏って防寒しているらしい。
家にも見当たらなかったし、この世界には防寒具はないのだろうか。それか、分厚い布というものが存在しないのか。
マフラーとセーターなら母さんは再現できそうな気がするし、提案してみてもいいかもしれない。
「ルイくん、久しぶりー！」

「久しぶり、リタお姉ちゃん！」
リタちゃんが僕をぎゅっと抱きしめてくれるので、僕もぎゅっと抱きしめ返した。
服についた雪が顔に当たって冷たいけど、心は温かい。
最近はレオンの件とか領主さまの奥さまの病気とかいろいろあったから、いい気分転換だ。
「今年からはルイくんも一緒なの？」
「父さんたちがいいって言ったから」
トールくんの質問にレオンが答える。
今年から目一杯遊ぼうね！
僕はそんな思いを込めて、トールくんに微笑んだ。
「そんじゃ、みんなで雪投げしようぜ！」
「ええ、いいわよ」
「やろやろー！」
「人数が多いほうが楽しめるしね」
サンくんの提案にみんなが賛同する。
雪投げ……名前の響きからして前世にもあったあれかな？
「ルイは僕と一緒にやろうか」
レオンに誘われて、僕は頷いた。

「うん！」
僕たちは拓けた場所へと移動した。たしかに今からやることは、周囲が広くないと危険かも。
「じゃあ、どう分ける？」
トールくんの問いに、レオンが真っ先に答えた。
「トールと一緒がいい」
「わたしもトールと一緒がいいわ！」
「俺だって！」
「わたしも！」
すぐにみんなでトールくんの取り合いが始まった。
トールくん、雪投げ強いのかな？
僕がぼんやりそんなことを考えているうちに、チーム分けが終わり、雪投げが始まった。
サンくん、トールくん、リリーちゃんの三人が敵チームで、僕はリタちゃん、レオンと一緒だ。
雪投げは、雪を相手に投げつけ合うもので、名前が違うだけで雪合戦と一緒だった。
雪合戦自体経験のない僕は、ワクワクしながら雪玉を作ろうと走り出したんだけど――
「うわぁっ！」
トールくんが勢いよく投げた雪玉が、風切り音を鳴らしながら僕の顔の横を通りすぎた。
心臓がドキドキと大きな鼓動を鳴らしている。

いや、今の豪速球はなんですか⁉
「ト、トールお兄ちゃん、今のは……？」
「今の？　僕のスキルの『投擲（とうてき）』だけど」
「『投擲』⁉」
トールくん、そんな物騒なスキルを持ってたの⁉
リタちゃんはフェラグ――前世で言うところの鬼ごっこ最強スキルだったけど、トールくんは雪合戦最強スキルじゃないか！
そこで、僕は試合前にみんながトールくんを取り合っていた光景を思い出した。
たしかに、これならトールくんと一緒にチームを組みたいって考えるなぁ。
「でも、ルイくんすごいね。あれを避けられた人なんて今までいなかったんだけど」
いや、なんか命の危機を感じて反射的に避けてしまっただけです。
あれ、僕が当たったら怪我なんてものじゃ済まなさそうだよ。実物は見たことないけど、感覚的にはプロ野球選手が投げるボールみたいな速度だったもん。
みんなは怪我とかなかったのかな。
「ねぇ、トールお兄ちゃんの雪って、当たっても大丈夫なの？」
「うん。ちょっと痛いだけだよ」
そう言ったレオンの目が泳いだのを僕は見逃さなかった。

やっぱり危険なんじゃないか！　フェラグの時のリタちゃんの『疾走』はまだしも、これは周りに被害が出る。
「トールお兄ちゃん、スキル使わないで！　怖い！」
僕がそう訴えかけると、トールくんはピンとこないながらも了承してくれた。
「そ、そう……？　わかった」
よかった。これで安全に雪遊びができる。そう思った瞬間――
「ぶっ！」
僕の顔面に雪が直撃した。雪を払うと、そこには誇らしげな顔で立つトールくんがいた。
あれ？　今、雪投げました？
「お兄ちゃん、スキル使ったの？」
「使ってないよ。普通に投げただけ」
いや、スキル無しに普通に上手なんかい！
結局、トールくんが強すぎて僕たちのチームは負けてしまった。

◇　◇　◇

雪投げが終わり、トールくんたちと解散した後。

（……誰かいる？）
レオンと家に帰る途中で、誰かが後ろからついてきているような気配を感じた。
ただ貧民街の時とは違い、あまり怪しさがなく、尾行かどうかの確信が持てない。
もしかしたら僕の気のせいかもしれない。
もし尾行なのだとしたら、ルディさんの仲間だろうか。それともルディさんが追っている白夜の会の者たちだろうか。その目的は？
そもそも、狙いが僕なのか、レオンなのか、はたまた両方なのか。それすらもわからない。
僕から接触を図ろうとも考えたけど、レオンがいる状況でそれは危険だし、レオンを置いて一人になるというのも難しい。だからといって、このままだと僕たちの家を教えることになる。それだけは避けたほうがいいだろう。
「ねぇ、レオン」
「うん？　どうしたの、ルイ」
「僕、大事なお守りを持ってたんだけど、どこにもなくて……雪投げしてる時に落としたかもしれないから、一緒に探してくれない？」
「お守り？　そんなのあったの？」
「前にもらったんだ」
詳しい情報は言わない。あくまでも尾行してきた者に家の場所を伝えないための嘘だからだ。

ここで引き返せば少なくともしばらく家の場所を知るすべはなくなる。
「わかった。風もあまり強くないし、戻って探してみようか」
「うん」
僕とレオンが振り向くと、後ろにあったはずの気配はなくなっていた。気のせいだったのだろうか。それとも、警戒されて隠れられたか。
でもこれなら無暗につけてくることはなさそうだ。
「……ごめん。やっぱりいいや。お家に帰ろう」
「そう？」
レオンは戸惑った様子を見せながらも再び家の方角のほうに歩き始める。
しばらく後ろを警戒していたけど、それ以降は気配を感じることはなく、僕たちは家に帰りついたのだった。

◇　◇　◇

家に帰った僕は、ルディさんにもらったブローチを見つめていた。
あの気配は、ルディさんの関係者だったんだろうか。
だが、ルディさんとは僕とのやり取りは口外禁止の契約を結んでいる。僕のことがそのまま伝わる可能性はない。せいぜい、子どもを見かけたと伝えるくらいだろう。
その言葉を怪しんで、僕をつけてきたというのなら説明がつく。
だが、レオンが狙いだった場合もある。ルディさんもレオンから話を聞くために僕たちの家を訪ねてきていたし、初めからレオンの動向を探るために尾行していた可能性も高い。
だけど、そのどちらでもなかった場合。もし、白夜の会の関係者だったのなら。狙いが僕でもレオンでも、事態はさらにややこしくなる。
ルディさんと話す機会があれば、尾行していた人物は割り出せるかもしれない。でも、ルディさんがどこにいるのかわからない以上、こちらから接触するのはほぼ不可能だ。
僕は家族と一緒に快適な生活がしたかっただけなのに、どうしてこんなややこしい事態になったんだ。レオンが狙われるような理由が何かあったのか？　転生者の僕に神が何かしら試練を与えようとしているとでも言うのだろうか。
もしそうなら、一発殴ってやりたい。僕を試すのはいいとしても、家族を巻き込まないでほしい。
……思考が逸れすぎた。今は、あの尾行していた者の目的を探ることだ。
ルディさんの仲間なのか、白夜の会の関係者なのか、はたまたどちらとも違う誰かなのか。それだけでも知りたい
やはり、なんとかしてルディさんと接触できる方法を考えるしかないか。だけど、闇雲に捜したって見つかるものではない。

立ち読みサンプル
はここまで